母澤寛

河遊俠傳

駿河遊俠傳　奥附

著者　子母澤寛

発行者　小野詮造

発行所　株式会社文藝春秋新社
東京都中央区銀座西八ノ四

発行日　昭和三十八年十一月二十五日　初版

印刷　凸版印刷株式会社

製本　矢嶋製本株式会社　製函　文京紙器株式会社

定価　五〇〇円

駿河遊俠傳　目次

狸沼　九頁
宇津谷峠　十五頁
置てけ堀　二十一頁
骰子　二十七頁
三州寺津　三十三頁
振袖　三十九頁
三河三川　四十五頁
十里の道　五十一頁
時の氏神　五十八頁
世間の目　六十四頁

霧ケ城下　七十頁
序二段　七十六頁
一人独鈷　八十三頁
馬鹿の中　八十九頁
蟹　九十五頁
山鳥　百一頁
四国遍路　百八頁
冬の港　百十四頁
江尻の小島屋　百二十頁
飯　百二十六頁
草鞋　百三十三頁
宿端れ　百三十九頁
蔓金　百四十六頁

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

木賀の里　百五十二頁
木蓮　百五十八頁
三日月　百六十四頁
藪牢　百七十頁
箒尻　百七十七頁
赤坂並木　百八十三頁
化粧褌　百九十頁
鶴さんの死　百九十六頁
天狗　二百三頁
二人口　二百九頁
平八狐　二百十六頁
春の海　二百二十二頁
飯屋の浅吉　二百二十九頁

安政二年　二百三十五頁
伊勢路　二百四十一頁
仏心　二百四十八頁
自棄　二百五十四頁
表街道　二百六十頁
甲斐の落葉　二百六十六頁
子拾い　二百七十二頁
旅空　二百七十八頁
年の瀬　二百八十四頁
金比羅詣　二百九十一頁
女芝居　二百九十七頁
十八番　三百二頁
木戸破り　三百八頁

慾　三百十五頁
生死　三百二十一頁
石松代參　三百二十八頁
生疵　三百三十四頁
石の地藏尊　三百四十一頁
用水堀　三百四十七頁
首代　三百五十三頁
噂の火　三百五十九頁
酒亭駕屋　三百六十五頁
肱　三百七十一頁
逆恨　三百七十七頁

扉カット　次郎長筆蹟

駿河遊俠傳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

狸沼

駿河府中安東村に男あり。その名西ケ谷文吉。東は三島、西は大井川までの間を縄張りとして身内の子分およそ二千。人「安東の文吉さん」と通称した。

天保十年己亥四月の末である。文吉はたった一人村はずれの狸沼の芦の間で鮒を釣っていた。手拭の頬かぶり、筒袖縞木綿の粗末な袷、わら草履をはいていた。

少し離れて森があって、その手前の畑の片隅に眠っているような沼である。空の白い雲がくっきりと映っている。

「親ぶーん」

ばたばたと畑の道を駈けて来た男がいきなり大きな声でよんだ。それが余り近かったので、文吉が芦の間にぬっと立つと、こんどはその男が引っくり返る程びっくりした。

「やっと食いの立って来たところだ、静かにしろえ」

「へえ」

「騒々しい男だ」

「相すんません。あの野郎がまたやってやがるんです。いつもは親分はお許しがねえが、仏の顔も三度でごぜえます、今度はあっし共にお任せなすって下さい」

「松う、お前どうしてまあそう人を痛めるが好きなのだ、困った病えだ」

とにやりとした文吉は

「ほら、お前のくだらねえ顔を見ている間に、浮子が引込まれて終った。大変だ。こ奴ぁ余程の大物だぞ」

子分、といっても海道筋では、何処へ行っても一かどの親分で通る池ケ谷村の松五郎。それのいる事などは、ほったらかして竿に夢中である。

その糸がふっつり切れた。文吉は怖い顔でじろりと松五郎をにらんだ。

「清水港の米屋だとかいったな。して見れぁ堅気さんだ。よく訳を話して送って行ってやれ」

「そうは参りません。堅気といっても今はもう店も閉め、方々の渡世場を荒らし廻っているすれっからし。しかも堅気さん方には気のつかねえいかさま骰子を使う詐欺ばくち、勘弁の出来ねえ野郎です」

「次郎長とかいったな」

「さよです」

「松う、も一遍追払え」

文吉はそういったが、松五郎はうんと云わない。

もう黄昏れて来た。春たけた駿河の匂が賤機山の麓の辺りに一ぱいに立こめている。

清水の若いいかさま師次郎長が、どうして松五郎達の動きを知ったか、その晩はぷつりと、姿を晦して終った。
一日間をおいての夜であった。糠のような春の小雨が降っていた。松が知合いに病人があって、見舞いに行った戻り、真っ暗な道でぱったりと、いつも自分のばくち場へ来る客のお茶の小さな仲買をやっている下八幡の金六と嘉市に逢った。
「大そうしょげていらっしゃる、どうなさいました」
松五郎が丁寧な口をきいた。
「おや」
と二人はびっくりして
「今日という今日は、まごまごしてれぁ腹の皮も引むかれるところだった」
それでも金六はこれだけの冗談口を叩けたが嘉市は声も出ない。
「目が出ませんでしたか。また明日仇討でございますね」
そういう松五郎へ金六は顔をくっつけるようにして
「親分、こっちだって満更今夜はじめて壺を見たんじゃあないんだ。あたしゃあ、どうもあれは、いかさまだと思うんだがね」
「え」
「壺をふったのは清水の次郎長という云わばまあ半可打だが、こ奴がいざとなると、不思議に番切り番切り、好きな目をころがすんだ」
「麻畑北の上州床だな」
「そうだよ」
「はっはっ、子分のあたしの口から云っちゃあおかしいがこの土地にゃあ日本国中何処へ行っても通用する文吉という大親分の遊び場がある。ああた方、そんな得態の知れねえところへ引っ張り込まれなさるのが第一に不覚ですね、河童に尻子玉をむけて行くようなもんです」
「いや、うまい口車に乗って、とんだ泣を見ましたよ、今日向後あんなところへ足は向けない」
「それが宜しうございます」
松五郎は驚ろいた顔もせず、程々に愛嬌をいって、やがて二人と別れたが、その二人の下駄の音が闇の中に消えるのを待って、それ迄かぶっていた破れかけた番傘を、空へ投げ上げると、下帯の見える程に高尻をかかげ、跣足になって矢のように駈け出した。
柳新田の政蔵は、たった今、自分の持場になっている親分の遊び場を廻って、自分の家へ帰って来たところ。まだ荒壁だけの物置小屋見たいな家で、横に小さな池があり、柳が真っ青である。
一人ものの政蔵は、薄莫蓙だけの炉の前に仰向けにねころんで、ああああと手足を延ばしたところであった。
「おい、政、政」

外から声がした。
「何んだ、おれを気やすにぬかしやがって――、え松兄ィか、松兄ィだね」
「そうだよ。清水のいかさま師がまた出て来やがった。こんどこそ、どうあっても首っ玉を引抜いてやる」
「また出やがったか」
政蔵は跣足のまま土間へ飛下りて来て、心張棒をもぐように脱した。
「何処へ出やがったよ兄ィ」
「嘗めてやがる。また麻畑北の髪床だ」
「そうか。こんどこそぁ生かしちゃ置けめえ」
麻畑北の髪結上州屋常という男はもともと大した奴ではない。しかしずいぶん堅気さんをたぶらかしては目に余る真似をする。それはかねて知っているが、こんどは、清水港の小ばくち打ちで、いかさま骰子を使う次郎長という青二才をつれ込んで来て、平気でお客を集めていやがる。一家の者たちは、こんな男をむきになって相手にするのは親分が忌やがるから、二度も三度も目こぼしして、つい二日前にも、ずいぶんひどい事をやったのだが、そのままにしておいた。
「図にのりやがる」
松五郎と政蔵は、長脇差を莚へ包んだのを抱いて、雨の中をぴしゃぴしゃ、ぴしゃぴしゃ、麻畑北へ駈けて行った。

常の髪床は、真っ暗に灯を消しているが、そこは蛇の道は蛇である。長年こうした事には馴れている。狭い二階から人間の熱気が溢れているし、しめ切った窓の隙間から、何にか木綿糸でも垂らしたような白いものがぼんやり見える。
二階で何をやっているか、一目ですぐわかった。
松五郎が表の雨戸を肩でぶち破って、つづいて政蔵も飛込んだ。長脇差をさしている。一人より通れない階段梯子を、どどっと押上って
「おい、下手に騒ぐと怪我をするぞ」
といってから松五郎がぱっとそこへ坐って両手をつき
「へえ、お客様方へ申上げます。わたくし共は安東一家の若い者でございます。こ奴らいかさま骰子を使って堅気さん方をたぶらかして居ります。このままでは済まされませんので渡世の作法に従って片をつけます。どうぞ、後々のところはお構いなく、お静かにお引取願いとう存じます」
といってから、怖い目をして
「おい常、集めた銭ぁ一文残らずその盆莫蓙へ並べろ」
松五郎が、ぱっと長脇差をぬいて、髪床の常の鼻っ先へ出した。それからそれを少しずつじりっじりっと、横にいる次郎長の鼻先へ廻した。
次郎長こと、駿河清水港米屋次郎八の養子長五郎、時に二十歳。例の旅の坊主から、お前さんの寿命は二十五歳ま

でだと、いい加減な事を云われて、根が文字が無いからそれをそのまま信じ込んで、もう死ぬのだと自棄っ糞になっていた頃である。

が次郎長は元来が十四五からばくちを打ち、しかも家出をして、二三年はいかさまばかりやって放浪していた。だから、尾引の骰子というものを使って詐欺をやる術は海道一であったなどと伝えられる。

明治七年薩藩出身の大迫貞清が静岡の県令になった。この時に園遊会を三保の松原で開いた。次郎長はもう五十五歳で、すっかり人間が出来てからだ。何処できいていたものか大迫県令が次郎長の肩を叩いて

「おはん、いかさま骰子を使う事がうまかったそうだな」

と笑い話にした。

ところが次郎長は恐入るどころか

「では一つ、御座興にお目にかけましょう」

といった。

ちょっと妙にもなったが、大迫も次郎長も、実に淡々としたやりとりをしているので大気忽ち清澄。やがて次郎長は、骰子を取寄せると、三保の松原の白い砂の上へ坐って、壺をふって見せた。それが一番一番思う通りの目が出る。流石の剛腹な県令も舌を巻いて感心した。

後年ここ迄大人になった次郎長だが、まだ若い時だ。文吉一家でも腕の立つという松五郎に現場を抑さえられたんではもう仕方がない。少し血の気のひいた顔で口を結んで黙っていた。

常は真っ赤にのぼせたが、根が悪い奴だけに、目の玉をくるくるさせて、慄えた。

「さ、来い」

柳新田の政が、うしろへ廻ると、力任せにその背中を蹴飛ばした。次郎長は、頭のつっかえそうな狭い二階の隅っこへかたまったお客へ

「おさわがせいたしました」

と静かな声でいって、落着いて立った。

松五郎、政蔵は、二人を引っ張って文吉親分のところへやって来る。

途中で一頻り降りになったので、みんなびしょぬれであった。文吉は上り端まで出て来て、じろりと見据えたが何んにも云わなかった。

松五郎は大目に見てやればいい気になってまたもやいかさまばくちをやっていた一埒を語り、

「こんな事じゃあ、悪が天下を占める、親分、あっしらぁ、いつ迄見のがしては、こ奴らの片棒担いでいるのも同然ですよ」

といった。髷から顔へ雨のしずくが伝っている。文吉はふところの手拭を、ぽんと松五郎へ投げてやった。

「今夜の中に狸沼へ沈みにかけます」

政蔵が口を尖らせてそういった。
「はっはっ、馬鹿ぁいうな、それじゃあおれが明日から鮒が釣れねえじゃあねえか」
文吉は、声は笑ったが目だけはじいーっと次郎長を見詰めて
「おい、いい若けえ者が馬鹿な真似をするな」
といってから
「松も政も、おれが代って詫をするから、も一度だけ勘弁してやってくれ」
「えっ」
「先のある若えもンだ、とかく気負って馬鹿をやる。この人らもうこの上恥をかくような事はしねえだろう」
政蔵が、ちえっと舌打をして、いかにも忌々しそうに、片足で地を蹴った。
「五右衛門が沸いている、そ奴らも一緒に入れてけえしてやれ、風邪をひくといけねえ」
文吉は、それっきりで、くるっと廻ると、そのまま奥へ入って行って終った。
四人は、いつ迄も土間に突っ立ったままでいた。
「外土地から流込んで来やがって帳場内でいかさまをふって、親分のところへ引立てられたら、どうなるものか、おのら満更知らねえでもなかったろう」
松五郎は、何んだか、膝が砕ける気持で、一人ごとのようにそんな事をいった。
全くだ、命までとは行かなくても、脚の一本や腕位はとても無事とは行かない。次郎長は今日まで何処かの子分になり三ン下の冷飯食いの修行を知らない。米屋の伜がぐれ込んだだけの、まだ半端者とも行かない身の上だが、それ位の事は知っている。たった今まで目の前にいた文吉には、頭からぐんぐん押しつけられるような気持で、息が詰った。
文吉はこの時も一見百姓おやじとより見えない風采であった。が、両手を軽く握って、だらりと両脇へ下げ、股を自然にひらいて、ふんわりと上り端の板へ立ったあの姿は、次郎長にとってはこれ迄かつて一度も、何処でも見たことのなかった人間のかたちであった。
風呂へ入れて貰って、その上、簑と笠をくれた。松五郎は、
「二度とまごまごやって来やがると、こんどこそぁ命はねえぞ。わかったか」
吐きつけるようにいった。
「わかった」
次郎長ははっきりそういって、常と並んで外へ出た。雨はまた小降りで、夜明けに近い行く春の花の匂が何処からか漂って来ている。
ものの三町も来た。
「常さん、お別れだ」

とさっきからずっと無言の次郎長がいった。
「お別れって、お前、どうするんだよ」
「おれぁ今日まで親分のふんどしを洗う大切な修行をしていなかったのに気がついた。これからすっぱりとやり直すのだ。このまま旅へ出る」
「といったってお前、清水港には十八になる女房があるといっていたじゃあねえか」
「ああ」
と次郎長はがっくりと首だれたが
「十六でおれの嫁になってたった二年。思えばあ奴も不幸な女だが、諦めて当分一人で辛抱して貰うより外ぁねえようだ」
「薄情じゃねえか」
「詫ぁいくらでもする。じゃ、常さん」
と次郎長がちょっと駈け出した。大きな椎の木があって、その下に庚申塚が見える。
「おっ、まっま、待ってくれ」
と髪常が
「次郎長さん、おれも一緒に行く、つれて行っちゃあくれねえか」
「何」
と、こんどは次郎長がびっくりした。
「お前はああして見世もあり、旅へ出る事はねえだろう」
「いや、あの見世ぁとっくに借金の質にへえり、いつ迄ああしては居れねえのだ。この辺で、おれもいっそ旅へ出て、のるかそるかやって見る」
常は呑んきな独身である。その上、いかさまばくちで堅気さんをごま化して悪どい真似もしている。どっちみち世間はとことん狭くなっていた。
次郎長はいつの間にか歩き出していた。
そのうしろへ、しょんぼりと常がくっついて行く。その哀れな格好を見ると、こ奴、あるいはそんなに根っからの悪人ではないかも知れない。
ほのぼのと、夜が明けて来た。雨が煙のようで、簑笠に尻からげ、素足に草鞋の二人は、鞠子への登りの道をとぼとぼと歩いていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com